

人間として生きる

同和教育担当 阿部 憲作

1. 語るということ、変わるということ

(1) 「語るということ」

「部落」という意識、何歳頃からこの意識は目醒めてくるものだろうか、私自身ふりかえってみてはつきり記憶していることがある。

※ ※ ※

こう書き綴られていく丸岡忠雄さんの「意識の芽ばえ」。昨年6月15日、吉成先生と3年F組の生徒が一丸となり、全校全体学習の資料として、「意識の芽ばえ」に取り組んだ。

授業の中で生徒・教師の「部落」に対する意識の芽ばえが次々と明らかにされていった。それは同時に、差別意識から人間が解放されていく出発点でもあった。生徒の心の中に眠っている様々な意識、その中でも部落に対する意識が明らかにされたことは、吉成先生自身が部落に対する意識の芽ばえを「語ること」から出発したと言える。

発表が絶え間なく続いていく。まるで火山から吹き出すマグマのようだった。中学生になるとあまり発言しないと言われているが、決してそうではない。この全体学習を見てもらえれば明らかである。むしろ3年生にもなると、部落問題を自分の生活に照らし合わせながら、より理論的に自分の思いを語るができる。そこには何の駆け引きも偽りもない。仲間の思いに必死に応えていこうとする熱い人間の魂だけが、生徒を光り輝かせているのである。

今まで生徒の発言力を眠らせてきたのは、発言しないという教師の生徒に対するイメージがそうさせてきたのだと思う。そして、何よりも教師が自分自身を語らなかつたこと。教師が語らないのに生徒にだけ語れというのは、筋が通らない。

私はかつてそんな不合理なことを生徒に押しつけていた教師であった。だから、授業をしても、いつも私の一方通行で重苦しい雰囲気は漂っていた。そして、部落問題学習が近づくとの授業にすり換えたくなったこともあった。部落問題学習とは何なのか、同和教育とは何なのか、教師になった当時、私は何もわかつていなかった。私は部落問題を語れない教師だった。

ある高校生友の会でこんなことを語る人がいた。「今の世の中、差別することがタブーにならないといけないのに、部落問題を語るものがタブーになっている。」

部落問題を語るができない、その心の底にある意識は何なのか、私が歩んできた道を反省しながら明らかにしてみたい。

※ ※ ※

① 「差別の檻に閉じこめられて」

◆ 「意識の芽ばえ」

私が部落問題と関わりを持つようになったとはつきり記憶しているのは、中学生になった頃だった。しかし、部落問題と出会っているのは、中学生よりもっと以前からで、まるで空気を吸うかのように差別意識をもつようになる。その証拠に、はつきりと聞いたのは誰からというわけではないが、どこが被差別部落で、誰が部落出身だということをうすうす感じていた。これが部落差別の恐ろしいところだと思う。しかし、その当時は、それが差別意識だとは判断できなかった。部落は何かが違う、何か悲惨なところだという意識をもつようになっていた。そして、その意識は後々まで尾を引くようになる。当時はその意識が、人間性を喪失させ、私自

身の魂を傷つけていくことなど予想もしなかった。

しかし、そんな差別意識は持っているが、部落の友達のことになると話は違った。

中学生の頃、結婚について親に聞いてみたことがある。当時私の通っていた中学校は、文部省指定同和教育研究発表会の研究指定を受けていたせいとか、ぼんやりとではあるが熱心に部落問題学習をしてきた記憶がある。中学3年生の頃だったと思う。学習も深まった頃、

「ぼくが部落の人と結婚するようになったらどうする？」

と、家に帰って親に聞いてみた。親は、いろんな理屈をつけては反対した。

「部落の人は私やと違うから結婚はできない。」

「どこが違う？同じ人間だろ。」

「お前は知らんのじゃ。母さんは小さいときによくいじめられた。」

「部落の人はみないじめるんか。いじめは部落外の人やあってあるではないか。何よりも結婚は本人同志の愛情の問題ではないか。」

「私やが許しても世間が反対する。」

「世間と自分は関係ない。世間に反対される筋合いはない。」

こういった会話が延々と続いた記憶がある。

当時、親に反発していく支えになっていたのは、確かに友達存在であった。いつも遊んでいたその友達のことを悪く言われているようで、そのことがたまに私の心を痛めた。しかし、その痛くなる心の源は何だろう。私は差別と闘っているようにも見えるが、今思えば決してそうとは言いきれない。私はそのとき、その友達と同じ高さに立っていたのだろうか、友達の本当の痛みや怒りを共有できていただろうかと思う。

②「同和教育の出発点」

◆「教師というの名のもとに」

私が、資料「意識の芽ばえ」に出会ったのは、新任教員として藍住中学校に赴任してからであった。しかし、私は先にも書いたように、当時丸岡さんのように部落問題を語る事ができなかった。その理由の一つは、部落問題を正しく認識できてないことから生まれてくる恐れだったように思う。私は教師になったとたん一人の人間としてではなく、教壇に立ち、「教師だから、差別を許さない」と自分を偽り、生徒より一段上に立って説教をしていた。それは自分の差別意識を生徒の前にさらけ出すことを恐れていたからである。自分の差別意識はどこか遠くに置いておきたかった。「教師だから」という権力の名のもとに、私は私自身の人間性をも辱めていたことに気づいていなかった。

◆「部落はどこにある」

6月14日の学習会で、「部落はどこにある」という教師の問いかけがあった。

生徒は、「それは心の中にあると思います。……」と語っていく。

話は盛り上がっていく。全体学習の中でもこのことが問われていった。

「同和問題は国民的課題」である。しかし、私には、はじめ自分自身の問題だとは思えなかった。なぜ自分の問題なのか。「部落は差別するものがいなければ存在しない」ということ、そして、「部落は私の心の中にある」、「部落という目で見ているのは私自身である」からである。

当時の私は、差別を受けるのは部落の人たちであって、私たち教師は、その人たちのために

同和教育をしていくんだと勘違いしていた。そのこと自体が差別だと気づかず、生徒たちを前に、「私がどうかしてやらねば」という傲慢な態度をとり、憎むべき同情心をもって教師をしていた。〔先に書いた「友達のことを悪く言われているようで、そのことがたまたま私の心を痛めた。」というその痛くなる心の源は、まさしくこの傲慢さである。〕

差別の責任を他の人に転嫁し、私は醜い偽善者になっていた。

そんな私であったから、当然のことであるが、生徒も自分自身の問題にならない。それでも「差別はいけない」という当たり前の言葉を、何度も生徒に押しつけようとしていた。そんな私が担任していたクラスの生徒は、いっこうに自分を語ろうとしない。

生徒は私自身を映す鏡であった。その鏡に映った醜い姿は、生徒によってやっと自分だとわかるようになる。

◆「語ることへ」

私の同和教育は、鏡に映った醜い自分の姿が恥ずかしいと感じたときから出発している。他の教師からよく言われていたことであるが、このとき初めて、「自分自身を語る」ということが理解できるようになっていた。教師としてではなく、一人の人間として生徒と同じ視点に立つ。そして、自分自身の差別意識をどういうふうに洗おうとしているか生徒の前で明らかにしていく。そこから、何もかもがスタートしていった。

こうして緩やかではあるが生徒たちの姿に学ぶことのなかから、また、教師仲間と語り合うことのなかから、本当の同和教育とは何かを見つめていった。そして自分を語ることを通して一つ、また一つともがきながら自分の差別意識を洗ってきた。

ここに、そんな私の実践記録がある。私が赴任した2校めの木屋平中学校でのことである。当校は徳島県中学校同和教育研究大会の問題提起を引き受けていた。「自分自身を語ることが私を、人間を豊かにする」ということがやっとわかり始めた頃のことである。次の文章はその当時発表した内容である。前任校で部落問題を通して多くの人たちとの出会いから学んだことやそれを通して生まれた目に見えない絆が、私を「がんばれ。生徒と共に本当の幸せを求めていきなさい。」と励ましてくれていた。

※ ※ ※

「美しく生きる」

本校は美しい剣山のふもとにあり、山間僻地校である。村内には2つの小学校があり、通学距離が10km以上にも及ぶ生徒がいて、通学が困難な理由から入学と同時に全校生徒が入寮する全寮制をとっている。

本校に赴任して初めて子供たちと出会った日……。心のこもったあいさつや山々にこだまするような歌声を聞いた。その53人のすばらしい子供たちが私たちを迎えてくれたことを昨日の事のように思い出す。そして私は純粋で心優しい2年A組の14人の子供たちを担任することになった。

一方、村の人たちは、私たちが道を歩けばどの人も朗らかな笑顔であいさつを交わしてくれる。また、ある一人のおばあさんが住んでいる家の前の道が台風の災害で崩れたとき、地域の人みんながすぐに修復に駆けつけたそうである。

このように助け合いながら生きている村の人々に接し、人間としてとても暖かいものを感じた。しかし、村の人の中には、「同和教育いうて、子供が知らんことを教えるから差別がなくなるんだ」とか、「部落差別は私らには関係ない」という人がいる。大人も子供たちも、

部落差別をどこか遠くの世界にあるものとしてとらえていることを痛感した。

前任校で部落差別の中を、誇り高く生きる子供たちや先生との出会いがあった。私の出会っていく人たち子供たちが、その子供や先生を差別するような人間に決してなあってほしくない。同時に部落差別と闘いながら誇り高く生きている人々のすばらしい生き方や優しさに学び、本当の人間らしい生き方をしてほしいという願いをもって同和教育に取り組みはじめた。

担任した14人の子供たちの様子は、私たち教師の前では純粹で素直であったが、子供たちだけの世界になると、明るさがなく言いたいことがお互いに言えないという雰囲気は漂っていた。また、一人ひとりの子供を見つめてみると、思いやりのないA子、B子。その2人に付和雷同する周りの子供たちがいた。そして、おとなしく笑いの少ないC子がいた。そのC子が生活ノートに、「先生、私たちのクラスには差別があります。でも今は言えません」と書いてきた。

A子は3歳のとき、生みの親と子供ができない育ての親との相談で養女となった。そして、そのことを生活ノートに書いてくるようになりわかったことであるが、育ての親とうまくいかず悩んでいたのである。

A子は小学生の頃からB子と一緒に誰かれとなくいじめをし、中学生になると他の小学校出身のC子はいじめだしたということである。

私自身も過去をふりかえってみると、幼い頃からA子と同じような経験をもっていた。今思えば、誰も自分を理解してくれない、信じてもらえない、自分は一人つきりなんだというどうしようもない寂しさから、友達を傷つけたり親を苦しめたりしていた。部落問題を通して自分自身が見えるようになり、また、他の人を傷つければ傷つけるほど、自分自身を傷つけていたことも学んだ。

私は、A子の悲しみをみんなで幸せに変えていきたい。A子を幸せにすることがみんなの幸せなんだと決意し、さらに取り組んでいった。

丸岡忠雄さんの言葉に「自分をさらけだすことなしに、真の連帯はありえない」というのがある。A子をみんなで支えていくには、まず私自身が自分をさらけだすことだった。

文学教材は、人間そのものについて書かれてある。私も子供たちも心から信頼し合えるつながりをつくることを目標に、文学教材を通して人間を見つめ、自分を語っていった。そして私はいつも、「少ない人数だからこそあたたかめ合って生きていこう」、「2年A組は一人でもそろわないと、もう2年A組ではないんだ」と話していった。

そんな中で、佐藤文彦先生の「自分以下を求める心」を通して、授業中一人ひとりが語っていく中で、B子が、「先生、・・・私も・・・このクラスで・・・」と涙を流し言葉をつまらせた。周りの子供たちも泣きだした。

B子は、小学校6年生のとき父親を事故で亡くし、母親と妹たちや弟4人で貧しい生活を強いられていた。B子は自分の寂しさをまぎらわせるために友達をいじめていたことを語りだした。私はこの時、「過去の過ちがわかるようになったことは大きな成長じゃないか。これから先、その過ちとどう向き合っていくかが大切なんだ。失敗のない人はいない。失敗したと気づいたときこそ、大きなものをつかんで立ち上がろう」と自分に言い聞かせながら語っていた。

この頃から学級の中に笑顔が見られるようになった。笑うことが少なく涙もろかったC子も明るくなりはじめ、生き生きと学校生活を送れるようになってきた。また、学級の子供たちも

「淡染一揆」を通して、「三千人の人たちが団結できるのに、なぜ今まで団結できなかったのだろう。団結することの大切さを学んだ。」と、生活ノートに書いてくるようになった。

一人の仲間の悲しみをみんなで幸せに変えていこうとする共感と連帯の絆に包まれた学級集団ができつつある頃、「大きな喪失にたえてのみ あたらしい世界がひらける」という「峠」を学んだ。

A子は心を開きはじめ今まで自分が一番避けていたこと、一番醜い部分に目を向けだした。A子が人間としての生き方を真剣に見つめ、美しく生きたいというつぶやきが今も聞こえてくる。

14人の幸せに生きたいという願いが、私の願いだと感じたとき、丸岡さんの「意識の芽ばえ」などを通して、美しく生きる人間の生き方を子供たちと共に求めていった。私が部落問題とどうかかわってきたのか、そしてこれから先どう生きていくのかなど、毎日子供たちに語りかけていった。

そんななかで、A子は生活ノートに次のように書いてきた。

「この間阿部先生が『過去の自分をふりかえるとほんまにこわい』っていったけど、私も同じだなあと思いました。心の底から悲しんでくれる人や心配してくれる人がいなくて『こんなだったら、この世に生まれてこなければよかった』とか、『どうして木屋平に来たんだろう』とか、なんの解決にもならないことばかり考えていました。

先生は自分の生き方を変えてくれたのは、「同和教育だ」と書いていましたけど、私はあの時（1年生のとき）、まだ同和教育を他人ごととしてとらえていたから、考えもしませんでした。たぶん、あの時の自分を今の自分に変えてくれたのは、友達だと思います。私のせいで苦しめてきた友達。そのせいで（自分のせいで）、自分が苦しい思いをしてきたわけだけど、もしあのまますごしていたら、今大切な人をたくさんたくさん失っていたと思います。まだ14年と8ヵ月ちょっとしか生きてないけど、でもあの時の自分をのけたら、今まで心の中に書き続けたノートはほとんど白紙じゃないかなあって思います。中学を卒業するとき、心から『ありがとう』って言えるのは、友達だなあって思います。」

3年生になって「水平社宣言」に取り組んだ。部落問題に学ぶ子供たちは、毎日の生活すべてにおいてひたすらに生きぬき、その姿は輝いていた。また、ひたすらにがんばる子供たちに教職員集団はいつもあたたかかった。

教師が子供たちに学び、子供たちは教師から学ぶ。子供たちと教職員集団が学び合う中で、一人ひとりが心から一生懸命に生きる喜びを感じる毎日となっていった。そして、生活ノートを見るのが楽しみになり、子供たちと一体となって学べることに幸せを感じながら、部落問題を語っていった。かつて、自分の弱さに負けていたB子もA子と共に「水平社宣言」に学び、自らの生き方を見つめていった。

「水平社宣言は本当に偉大です。・・・私の今の生き方なら、熱や光がかけています。本当の優しさをしっかりと理解したわけではありませんから。でも、水平社宣言と本当の優しさは一緒なのだから水平社宣言を勉強することによって、本当の優しさが見えてきたならばそれは私にとって大きな大きな実りとなります。もう考えただけでドキドキします。自分が大きくなっていくのを自分の体で少し感じるすることができます。・・・」

12月6日、授業参観をかねて公開授業が行なわれた。この日は子供たちにとって一生忘れることができない授業になったと信じる。A子は授業後、次のように書いてきた。

「今日もまた感動の一日でした。14人が自分の意見を言える、これは本当に素晴らしいことだと思います。ノートなどに書くことはできても、その自分の考えを他の人に言うというのは、そのことを心から思っていればいるほど壁が厚いと思います。でも、3年A組のみんなはその壁を打ち破る勇氣をもっているのだからほんとにすごいと思います。きょうはものすごくすごすごく時間が短かったような気がします。私はもっと言いたいことがありました。2時間でも3時間でも時間があればあるほどいいと思いました。「50分では短すぎる」でも、その短い中でみなに自分の思いを聞いてもらえたから本当にうれしかったです。それと、「友達っていいなあ」と改めて思いました。Dさんが「T先生泣きながら出ていきよったよ」と言いました。私たちの授業をみて感動してくれました。感動を与えられる人間になれたんだ、と思いました。それに授業終了のチャイムが鳴ったのに、ずっと教室に残ってくれた方。他の学年へ行っていた方が入ってきてくださった方。そんな方々が少しでも同和問題について理解してくれるかもしれないって思うと、うれしくてたまりませんでした。それとEさんが発表して泣いて何も言えなくなったとき、私は自分の手が、「がんばれ、Eさん」って一生懸命固く握っているのにびっくりしました。そのとき、「ああ、私はEさんと心が一つになっとなる。これが優しさかなあ」って思いました。3年A組は本当にいいクラスだと思います。私は一生このクラスにいたことを誇りにしたいと思います。それと、私は「水平社宣言」とか、いろんな資料を勉強しているうちに本当の優しさについて追求すると、真の愛に出会えて本当の優しさについて追求することが勇氣なんじゃないかなあって自然に思えるようになりました。」

A子と共に学んできた仲間の一人はこう語った。

「私たちは今、一つになって美しく生きています。今ようやく「美しく生きる」ことの意味がわかったような気がします。いつまでも輝きを失わず、差別と闘う。これが美しく生きることだと思います。人間らしく生きること・・・美しく生きること」

また、A子が生活ノートに、「今日は今、本当に思っていることを詩にしました。読んでください。」と、「水平社宣言」に寄せる熱い思いを詩に表してきた。

※

「朝日」

山の向こうに 光が見える

あっ 朝日だ!!

朝日は 堂々と そして その背中に 人々の願いを背負い

そして 真正面から 愛を放ち

堂々と 堂々と 姿を見せていく

人の心がわからない人間は

太陽の光を あびない 人間

人の愛を うけとることの できない人間

太陽からの愛を 拒否 している人間

でも 太陽は そんな人間にも 平等に

愛 そして 優しさを 与える

愛のわかる人間は 太陽の光を 勇氣に変えて

そして 大きく 強く 美しく 生きてゆくことができる

すべての人間が そうできるのは

※

「水平社宣言」に学んだ子供たちは、「私たちはどこへ行っても心は一つなんだ。うれしいことやつらいことがあったときには、みんなで連絡を取り合おう」と誓い合い、卒業していった。今年6月末、仲間のE子が入院した。A子によってすぐに14人の仲間たちに伝わり全員で見舞いにいき、勇気づけた。私たちはこんなすばらしい子供たちを誇りに思う。

仲間として、人間として心から信じ合い支え合うことがよりすばらしい生き方を求めていくことの出発点だと思う。子供たちは中学校を卒業すると遠く親元を離れ、苦しい経済状態のもとに下宿生活をしなければならない。その行く手には多くの困難が待ち受けている。

村外へ進学した卒業生の中には、友達ができずに寂しい思いをしながら悩んでいる者がいると聞く。しかし、どんな困難が待ち受けていようとその困難を克服してほしい、力強く生きぬいてほしい。これは、すべての親の願いであり私たち教職員の願いでもある。

子供たちはやがて上級学校、実社会へと旅立っていく。この時私たちは子供たちにずっとついていけない。彼らを遠くから見守る立場にある。しかし、社会に旅立った子供たちが自らの困難を乗り越え、力強くたくましく生きていくために、ふるさと、学校、仲間がいつまでも子供たちを励まし続けると信じる。生徒一人ひとりの長い人生を勇気づけ励まし続けることが私たち教職員の使命だと思う。そして、そんな使命感にあふれた教職員集団によって実践されていく同和教育が、生徒一人ひとりのなかに、自らの在り方、生き方を考え、求め続けるエネルギーを与えていくと考える。私たちは、生徒一人ひとりのなかに、生きて働く同和教育をめざしがんばっていきたい。

※ ※ ※

14人の仲間は今年成人式を迎えた。現在も14人はそれぞれに一生懸命に生きている。今も「先生に出会えてよかった」と言ってくれる。私はその言葉をそのまま返した。「みんなに出会えてよかった。みんなを誇りにして今ががんばっている。」と。

木屋平中学校を去ってから4年が過ぎ去ったが、現在の私があるのはこうした積み重ねの結果である。その積み重ねの中で出会った多くの生徒や保護者、先生方に感謝の気持ちでいっぱいである。私を取り巻いていた多くの差別意識は、その人たちによって一つ一つはがれていった。

(2) 変わるということ

①「自分自身を見つめることのなかから」

◆「世間は自分」

「Y子は獅子になった」という資料がある。その中で、「・・・本当は一人ひとりの人が『世間』という実体のないものを隠れ蓑にして、個人の意志で差別しているのではないか」という一節がある。

いろんな人との出会いがあり、部落問題に対してある程度の認識が持てるようになった頃、差別に対して神経が研ぎ澄まされている自分になっていた。それはいいのだが、他の人の言動やマスコミ、新聞などに対しても異常なまでに敏感になっていた。そして、そこに差別性があると感じたとき、いかにも評論家のように批判をしている自分がいた。

また、私はつい最近まで、誰がこんなふう私に差別意識を植え付けてきたんだろうと考え

ていた。それは主に自分の親だったことは確かである。そして、自分の差別意識を親や社会の責任にしながら、何度も親の考えを批判し、親を憎んだことさえあった。親のもつ偏見が世間そのものだと思っていた。しかし、自分自身を見つめていく中で、それは大きな誤りだと気づいた。私は、親や社会を「隠れ蓑」にして私自身が自分の意志で差別してきたんだとわかってくる。

親は確かに部落問題を正しく認識していない。そのことから部落に対する偏見を何度も口にすることがあった。そのたびに口論になるが、それは単に私自身に力がなかつただけだった。親も同和教育を受けていない。そう思えば、私が部落問題を通して学んだことを理解してくれるまでじっくりと語ってあげよう。今思うことは、親に反発することで、自分自身の差別意識を押さえ付けようとしていたにすぎなかった。おろかなのは私自身であって、様々な差別と出会っているにもかかわらず、何の疑問も感じずに私自身が差別意識を育ててきたんだと思う。さらに、差別だとわかっているにもかかわらず、世間の中にどっぷりとつかっていたのである。今思うことは、親と色々な部落問題を語ることの中から、むしろ私はより確かな認識をもつようになってきたということである。

◆「一度きりの人生」

「世間が、みんなが」という大勢のなかに身をおく心理は、確かに楽なような気がする。しかし、自分自身は一体どこに存在するのだろうか。この世にたった一人しか存在しない自分という人間が、たった一度の人生を、真の人間として生きることも知らないまま、どんな生き方をしたいのかも考えないまま、大勢の流れの中に身を任せ、自分自身を見失った生き方はしたくない。何よりも、一度きりの人生を、私たちは決して差別をするために生まれてきたのではない。決して私たちは差別されるために生まれてきたのでもない。人間は、誰もがその生命を光り輝かすために生まれてきたのだ。部落問題に学ぶことを通して真にそう思うようになった。

◆「部落差別がなくなって幸福になれるのは・・・」

藍住中学校時代に出会った先生の一人に佐藤文彦先生がいる。この先生から学んだことはたくさんある。その中の一つに、

「『黒人差別がなくなって幸福になれるのは、白人である』ということを元アメリカ合衆国大統領のジミー・カーターが語った。この言葉はそのまま部落差別にも当てはまる。」とよく言われていた。

結婚の問題を語るとき、私はこの言葉の意味がよく理解できた。部落差別によって結婚の自由を奪われた例を何度も聞いた。被差別部落に生まれても部落外に生まれても、部落差別は人間の自由に生きる権利を奪っていく。

近年私の従弟が部落の女性と結婚した。従弟の親は、はじめはその結婚に反対であったが、私の親や伯父は「好き合っているのだから結婚させてあげなさい」と言い、二人は祝福されて結婚することができた。

私はそのことが、自分のことのようにうれしかった。私の親は、はじめは差別意識が強かった。以前の親であれば、結婚に反対する立場でかかわっていただろうと思う。私が部落問題を通して学んだことや、自分が変わってきたことを以前のように批判するのではなく、毎日のように話しかけていくことなかから、親の考え方が見違えるように変わってきたように思う。親が変わってきたそのことが、私は自分自身が差別の檻から解放されていくようで本当にうれしかった。私は自分で担ぐ必要もなかった差別する重い荷物を、少しではあるが軽くできたよ

うに思えた。部落差別をなくす取り組みは、私自身が差別から解放されることなんだということがわかりはじめた瞬間でもあった。

そして、私はこうして差別から解放されていく喜びを生徒にも語っていった。それに応えてK子という生徒が、生活ノートに姉の結婚問題について切々と書き綴ってきた。K子は、姉と共に部落問題に関わって悩んだり苦しんできた体験を学級で語り、校内意見発表会や板野郡の意見発表会でも堂々と語っていった。

※ ※ ※

「姉ちゃん おめでとう！」

あれは中学1年生の8月10日のことでした。市内で働いている姉が帰ってきて、久しぶりに家族そろって楽しく夕食をすませました。

その後私の部屋で姉と二人で、学校のことや友達のことなどおしゃべりをしていました。夜もふけて周囲が寝静まったころ、突然ニコニコして話していた姉が、うつむきかげんで不安そうにこう言うんです。

「K子、姉ちゃん今な、交際しよる人がおるんやけど部落の人らしいんよ。一年半ぐらい交際しよるんやけど、もう結婚しようと思うんよ……。」

「……………」

「ほなけど、おじいさんたちが、たぶん反対する。どうしよう……………」

姉の眼には涙がたまっていました。

ちょうどその頃、私は演劇部で「海が泣くとき」の中島一子さんの役をしていました。

一子さんを苦しめる部落差別は大きいです。一子さんとの出会いが私にとって姉を支える大きな力となりました。

私は、

「ほら反対するかもしれん。けど、絶対部落の人を悪く言うのはまちがっている。たとえ、親であっても許せん。もし、姉ちゃんの結婚に反対するようなら、私も姉ちゃんと一緒になって言ってあげる。反対されたけんやいうて、あきらめることはない。ついていき！」

って言うと、姉はうなずいたまま、下を向いていました。

そんなことがあってから、1年と3カ月が過ぎました。姉は、お母さんに、

「結婚したい人がおるんやけどな……………。部落の人なんよ。」

と言うと、母は、

「ふつうの人と結婚しなさい。」

の一言。お姉さんは、

「ふつうの人で……………。仕事やってまじめやし、やさしい……………」

思いがいっぱい、それ以上言葉になりませんでした。

すると

「まだ、おまはんやには、わからん。」

母は言うんです。父や祖父、祖母までもが、

「この頃は部落の人も、ふつうの人もわからんけど、昔は……………」

などと言うんです。

いつもはやさしいお母さんたちの顔が鬼のように見えたのです。それでも私は姉と二人であきらめずに、家族との話し合いを続けました。

差別は差別される側に問題があるのではなく、差別する側にその責任があるのだ。苦しみの中を生きてきた人の中にこそ、人間としての本当の優しさがあるんだ、ということ。

そんな日が1ヵ月ぐらい続いたあと、やっとお姉さん達二人にとっても、私にとっても本当にうれしい日がきたのです。

それは12月20日でした。おじいさんが、
「もう好きどうしがいっしょになるんやけん、なんも言わん。がんばり。」
お母さんも、
「これから苦しいこともあるけど、二人で力を合わせてやっていけるな。」
と、励ますように言ってくれました。

今年、1月に結婚式を挙げた姉のお腹の中には、いまではもう赤ちゃんがいるんです。そんな姉を気づかって、やさしく、身の回りの世話をやいたり、炊事の手伝いをしたりしているお兄さんの姿を見て、

「お姉ちゃん幸せだなあ！」
とうれしくなります。

これから先、私は、私の大好きなお姉さんと共に、部落差別を背負い、まっすぐに胸はって生きていきます。それが本当の人間の人間らしい生き方だと思うからです。

※ ※ ※

「部落差別はすべての人間の悲しみである」、そして、「部落差別がなくなれば、すべての人が幸福になれる」ということを、私はK子とその姉の生き方を通して知ることができた。

②「学び続けること」

◆「親に学ぶ」

私が幼い頃の話である。

私の家は家族が多く兼業農家であり、どちらかといえば経済的に貧しく、質素な暮らしだった。両親は朝は夜が明ける前に畑に向かう。畑仕事が終われば仕事に出かけ、仕事から帰ればまた畑に向かう。一日中働き詰めだった。いつも汗と泥にまみれていた。それも私たち家族のためである。ある日私が病気になったとき、母親が病院へ連れていってくれた。待合室で苦しがる私の胸を、母親は優しく撫でてくれる。そのとき隣にいた見知らぬおばさんが、「そんなごつい手で撫でたら、この子がかわいそう。」と私に同情してくれる。母は何も言わず、ただ悲しそうにしていたのを今も鮮やかに覚えている。私は母親の悲しそうな顔を見たとき、おばさんは私に対して親切で言ったことなのだろうが、その時私はおばさんに、憎悪に似た感情を抱いていた。母親の手は確かにたくましい。指は太く節くれだっており、大きな手をしている。しかしその手は、農業をしているのだから当然のことだ。その手は私たちを支えてくれた生活そのものなのだ。

母は、母が小さいとき、母親を病気で亡くしている。母は7人姉弟の長女であり学校にも行かず、母親代わりとして、かつ戦争も重なり、苦勞をしながら生きてきた。そんな母が、「こんなに一生懸命働いても生活は楽にならない。私たちはお前たち子供には、どんなことがあっても幸せな生活をしてほしい。」といつもつぶやいていたのを思い出す。そんな願いも受けとめることもできず、私は、当たり前だと思っていた母の手が、おばさんの「かわいそう」の一

言で、次第に恥ずかしいと思うようになっていた。その頃から私は、自分の親と友人の親との職業を比較しては、親を、そして自分自身を惨めな存在にしていた。

中学生になり部活動として陸上競技部に入部した。「シューズやユニフォームを買いたい。」と頼めば、いつも「部活動なんかやめてしまえ。そんな暇があれば、家の仕事を手伝え。」という言葉が返ってくる。県外試合に行くことになった。費用もかかる。試合に行く前日、「行かなくてもええ。行って何になる。」の一言。私は、悔しくて泣いていた。やっとのことで試合当日、お金を出してくれ行かせてくれたのだが、こんなことも重なって、さらに親を、そして自分自身を惨めな存在にしていた。

父親はあまり語らない。私が叱られた記憶は1回だけである。それも、私が遊んでいて怪我をしそうになったときだけである。いつも笑顔で私の成長を温かく見守っていてくれた。母親と同様によく働いた。父はある酒会社で酒を各店に運搬する運転手をしていた。朝早く農作業を終えて、会社に向かう。当時私は友達に父の仕事のことを、「父は会社に勤めている」としか答えられなかった。

幼いときは誇りに思っていた父や母のことが、私は年を重ねるにごとに恥ずかしくなっていた。

しかし、親は私のもっていた感情など、嘲り笑うかのように、以前にも増して顔に汗をかき泥にまみれながら黙々と働いていた。一生懸命に働いている姿が一番よく似合っていた。

◆「子に学ぶ」

最近の話である。

私には、2ヵ月も早く1500gで産まれた2歳になる子供がいる。産まれる寸前に医者は、「「障害」児になる可能性が約50%はありますよ。」と語った。私の頭に一瞬、「困った」という感覚が走った。無事産まれたあと、その感覚はやがて、日を重ねるごとに重い石のようになってくる。しかし、私の困惑など全く感知せず子供は一生懸命に生きようとしている。はちきれんばかりにそのからだからは、生命の輝きを放っていた。

◆「部落に学ぶ」

藍住中学校に赴任していた当時、学校は荒れていた。生徒の荒れがどこから生まれてくるのか、とことん生徒に寄り添う教師が何人もいた。その中でも、「人間（生徒）の悲しみが見えなくて、人間（生徒）の本当の幸せが見えるのか」といつも言っていた教師の姿に共感して、私も生徒に寄り添うようになっていた。そうしているうちに、いろんな生徒の生活が見えてきた。同時に、生徒そのものが社会の縮図のようにも感じた。そして、この荒れの中から生徒と共に生きることの喜びや差別に対する怒りを学んだと確信していた。

「先生、うちの子頼むでよ。父さんはいつも酒を飲んだくれてな。先生が頼りじゃけんな。」と、家庭訪問の時に話してくれた部落の母親。その母親の言葉は、今も脳裏に深く焼き付いている。その言葉の裏にある悲しみや怒りは、私の悲しみや怒りだと教えてくれた。

板野中学校に初めて赴任したとき、2年生を担任することになった。年度当初には必ず家庭訪問があるが、学習会に参加している生徒の地域が被差別部落だとわかる。初めて地域に入ったとき「ここが板野の部落なんだ。何も変わらないじゃないか。部落を意識してはいけない。」と自分に言い聞かせていた。本校に赴任することが決まったとき、「板野中学校は悪い」とか「板野は大変だろう」といった話を誰かれとなく聞いた。私は部落問題を認識しているつもり

であったが、今までのそれはあくまで頭の中での知識にしかすぎない。「それがどうした。何が言いたいのか。」と言い返してはいたが、私の意識の中には、意識してはならないという差別意識が働いていた。藍住で確信していたこと、母親から学んだことは何だったのだろうかと思う瞬間でもあった。

さらに、家庭訪問では親と部落問題について話をするべきだと思い、地域に入っていった。しかし、初めての家庭訪問ということで、部落問題をどう切り出していいかという戸惑いに加え、その話をするのが何か重たく感じていた。「お子さんは学習会に参加していますか。」と言うのが精一杯だった。学習会に参加していない生徒の親には、特に話しづらかった。そうやって家を後にしたとき、「どうしてすんなり言えないのだろう。」と、私の心の中にいやな感情が残っていた。

しかし、重たくなっているのは私だけで、部落にはいつものように今日も明るい笑顔と人間の優しさがあふれていた。

③「学ぶことから変わることに」

人間の心は様々な意識の集合体だと思う。「私」という人間は、私の身の回りの生活を通して、「私」が作ってきた意識の集合体によって存在しているのだと思う。その意識が基で、いろんな感覚、感情、感動などが生まれ、それが私の様々な行動を起こしているのだと思う。同和教育を進めていく中で、そんな「私」という人間がよく見えてくるようになる。そして、学ぼうとする姿勢をもち続けるなかで、そんな「私」の大きな過ちに気がついていく。

私を一生懸命育ててくれた父や母。ひたすら私たちのために働いてきた親の汗と泥が、美しいと思えるようになってきた。真っ黒に日焼けした顔や節くれだった手が、いとおいしいほどすてきに思えてきた。「私たちは、仕事に誇りをもって一生懸命働いてきた。」と両親が教えてくれた。いつも「やめろ」と言っていた部活動。それがエネルギーになって私はがんばり続けていた。「ぎりぎりのところで、自分の本当にやりたいことを一生懸命やりなさい」と教えてくれていたのである。

限りなく生命がほとばしる私たちの子供。その生命の輝きは、もう私たちだけのものではない。地球に生を受けた独自の生命体である。その生命は、「私の輝きをあなたたちの輝きとして、私と共に光り輝きなさい」と教えてくれた。

厳しい部落差別の中を必死に生きてきた部落の人たち。人の世の冷たさやはかなさを知っているからこそ、真に人間を尊敬することを教えてくれた。「私たちはいつも寄り添い、知恵を出しあって温めあいながら生きてきた。私たちを苦しめているのはあなたの差別意識そのものですよ」と教えてくれた。

私は、人間として本当に恥ずかしい生き方をしてきた。何度も何度も同じ過ちを繰り返してきたようにも思う。

差別は人間を分裂し、人間性を喪失させ、魂まで腐らせる。その腐った魂が自分の心の中にあるとわかったとき、どうしようもなく虚しく悲しくなってくる。その虚しさや悲しさは、やがて感謝へと変わっていく。その心を教えてくれたのが、私が差別していた親や子供、部落の人たちなのである。その人たちから、本当の人間の豊かさ、生き方を学んできたように思えてくる。

しかし、これからも同じ過ちを繰り返すかもしれない。この取り組みは、決して過去形になつてはならない。差別意識は洗い続けるものであって、その営みやめようとしたとき、また新しい差別意識が生まれてくるのである。そのためにも歩き学び続けなければならない。

部落問題を通して、同和教育とは人間の価値観を変えていくこと、自分の差別意識を洗っていくこと、すなわち人間がより人間らしく生きていくことだとわかった。

◆「痛み」

誰にも心に痛みがあるはずである。私にもある。その痛みは何故、そしてどこから生まれてくるのだろうかと思う。

私は中学校のころから、過食症を患っていた。その時は病気だとは思ってはいないが、その症状から自分は他の人とはどこか違うんだと思いつけていた。過食症から生まれてくる行動は、確かに異常である。その異常さが言い知れぬ不安や怯えとなって、私の心の中で膨らみ続ける。また、その異常さを私自身は恥ずかしいと思っていた。しかし、不安と怯えは膨らみ続けるのだが、「私は異常なんだ。こんなふうになるのは、私一人なんだ」と勝手に決めつけていたために、家族はもちろん友人にも誰一人として相談することができなかつた。若かつた私の心は痛み続けた。恥ずかしくて誰にも言えないということが、私を一層苦しめていた。胃の調子が悪いということで病院にも何度か通つた。けれども、医者にさえも過食症のことが言えなかつた。その苦しみは高校を卒業するまで続いた。その苦しみは大学に行つてからやっと癒されることになる。どうにかしてこの苦しみから逃れたいという思いで、信頼できる一人の友人に、全てを打ち明けた。友人は一瞬顔をこわばらせたが、「病院へ行つて、ちゃんとそのことを話せ」と言う。私はその友人に打ち明けたことで、何年間も重くのしかかっていた重荷がやっと軽くなったような思いになつた。自分から入つていた暗い長い長いトンネルの中から、やっと抜け出ることができ、明るい世界が一気に開けた感じであつた。そして、病院に行つた。医者は、「最近によくこんな症状をもつた人がいますよ。すぐ治ります」と本当にあっさりと言つた。その答えに、今まで悩んできた自分がばからしく思えてしかたがなかつた。

しかし、今でもあの時の痛みは忘れないし、忘れようとも思わない。今思えばばからしくても、あの青春時代の痛みは、部落問題を自分のものとする大きなエネルギーになっている。この痛みは自分で自分自身を差別してきた痛みであるがゆえに、差別することは自分自身の痛みになるということの証だとも思う。同時に、さまざまな差別に苦しむ生徒の痛みが自分の痛みになる源になっていると思つている。そして、学校や学級などに置き換えて言えば、自分の苦しみや痛みを自分だけのものにしないこと、自分の痛みを語ることを通して解放されていくということ、それが、学校、学級、仲間づくりの基本だとも思つている。

2. 全体学習

(1) 全体学習のはじまり

①「何かをはじめよう」

本校の同和教育の特徴の一つである全体学習がはじまつて4年が過ぎようとしている。生徒の差別に対する怒りの叫び。その怒りと怒りがぶつかり合い、仲間と連帯することの喜びを生み出してきた。その喜びを育ててきたのがこの全体学習であつた。

はじめは2年生単独の全体学習であつた。全体学習は、4月当初の2年生学年部会の会話の

中から生まれてきた。徳島県中学校同和教育研究大会を約1年半後に控え、生徒と共にがんばっていかうという意志統一のもと、当時学年主任の仁木先生が、「ひとまず全クラスが体育館に入って、生徒の発表の仕方などのオリエンテーションをしよう。」と私たちに投げ掛け、それに対し、森口先生が、「それなら体育館でいっそ部落問題学習をしよう。」と発案したことに端を発する。その言葉につられて仁木先生が「それならわしもやる。」と意気をみせる。他の先生はやや困惑していたようだが、私も自然と賛同していた。ただ、全体学習といういまだかつてなかった部落問題学習の形態に対して、自分自身が裸になるようなプレッシャーを感じずにいられなかった。しかし、今までの私たちの取り組みを振り返ったとき、何かを変えていかなければ、何かをはじめなければと潜在していた思いが、全体学習になっていったのだと思う。全体学習はこうして始まった。そして、2クラスが全体学習を終えた。そのうち、「先生、私たちのクラスはいつするの？」という生徒の教師に対する要望が、重かった教師の腰を持ち上げていた。すでに生徒は、教師以上に前向きであった。生徒は、より多くの仲間の前で自分の思いを語る喜びをつかんでいたのである。その喜びがこうして全体学習を現在に至らせているのである。

②「形から本物へ」

全体学習は2時間続きで、はじめの1時間は資料を通して、ある1クラスが公開授業を行なう。そして、2時間目はその公開授業を受けて、部落問題が自分にとって何なのかといったことを問いただし話し合っていく。学級、学年の枠を越え、まさに生徒と教師全員で取り組む部落問題学習であった。しかし、はじめは形ばかりに流されがちな授業であったように思う。生徒は一生懸命語ろうとするが、学習プリントに書かれた自分の思いを読むのが精一杯だった。

私も他の学級がする全体学習の資料に合わせ、こつこつと生徒と共に部落問題学習に取り組んでいた。ここにK子の生活ノートがある。彼女はいつもびっしり生活ノートに自分の思いを書いてきた。

「実際、部落の人間でない人は、部落の人間のつらさや悔しさがわかってないような気がします。ずっと前（今でも）親は、『いじめられよらんか？』とか、『友達おるんか？』って聞いてくる。どういう意味で私に言ったのかわからなかったけど、やっとわかったです。こんなことも言われました。『部落の子と仲良くしーよ。部落でない子はごっついずるがしこいけんな。』どういうことでしょう。私はそんなこと関係なしに友達をつくっていますが、はつきり言って少ないです。その友達もほとんどが部落の子です。親はよく『部落の者は口は悪いが根はちゃんとしとる。ほなけん、どんな苦しいことがあってもいじめにあっても歯を食いしばって耐える。』っていう。だからどんなに苦しいこと、つらいこと、悲しいことがあってもがんばっていた。みんなの本当のきれいごとでない、心の底で思っていることが知りたい。きれいごとはいらない。そんなのほしくない。いつまでも人の下にいるようでいやになるときがある。だから、わかってほしい。部落の人間の心の痛みを。」

K子の痛みは私の痛みだと感じたとき、私は部落問題学習にも自然と熱が入っていた。K子のノートもさらに書き綴られていく。

「授業に関係ないかも知れないけど・・・中学1年の時のできごとについて語ってみます。たとえば友達がA子さんとB子さんだったとします。あるときA子が私にひそひそ声で、『な

あなあB子って同和の子だろ?』そのとき胸がズキンツとした。まさか私も言われるのかと内心ビクビクしていた。A子がいなくなって、私は思い切ってB子に、『なあ、A子がなあ、B子のこと同和って言うけど、同和え?』って聞いた。B子は、『えっ、違うよ。〇〇に住んどのけん、そう思われるんよ。』って言った。私は口が開いて、『私部落の人間じゃ。』って言ってしまったんです。言うんじゃなかったってとつさに思った。B子は、『えー、うそー、ほんまー?』って不思議そうに聞かれた。でも、B子は私から逃げなかった。部落の人間だと知られて友人をなくすのが一番恐かった。でもB子は、普通にいつも通りしゃべりかけてくれた。逃げなかった。あの時の感動は忘れない。涙が出るほどうれしかった。A子をなぐって、B子にうれしくて抱きついて泣きそうになった。今、思い出すとわかってくれる人間がいる。話せばわかってくれる。自分に自信が少し湧いてきたような気がした。」

部落差別の現実をK子から学ぶことができる。K子の思いは、部落の生徒すべての思いでもある。しかし、その思いは学級すべての願いにはならなかった。それは私のせいだとうすうすわかっていたが、私もその時は精一杯だった。

やがて、2年生も終わりに近付いた頃のK子の生活ノート。

「・・・話は変わるけど、もうすぐ2月に2Eの全体学習がある。私はみんなの中で、口先だけで発表する子もいるかもしれないけど、先生、私に本当のことは言わせへんだろうな。部落外の人の中には必ずいる。『自分には関係ない』とか、『差別をなくそう』なんて、口先だけの自分勝手な奴がいる。部落外の子らは逃げている。その曲がった根性はすぐになおすことはできない。『自分は最初差別していたけれど、もうこれからはしません。』っていう声は、小6の時から何度も聞いてきた。聞きあきたぐらいだ。口先だけのきれいごとなら誰にでも言える。口先だけで言う奴らは逃げている。差別から逃げている。だから私はそういう人たちを弱い人間だと思う。私は人のことを言える立場じゃないけれど、本当のことを言えずにただ逃げる人間よりはずっとましだと思う。部落外の間人は、自分が部落民より上と思っているかいなか知らないけれど、上下の考えはよせ!って言いたくなる。」

はっきり言って、先生も私は疑っている。口先だけって感じがしたからだ。きれいごとなんていらないから、自分の本当の、心に思っている言葉を私たちに聞かせてほしい。そいでもって、手を挙げてその場だけの発表はやめてほしい。発表したからいいっていうんじゃない。発表して、自分が思っていることをみんなに言って、わかり合えるのが本当だと思う。授業だけで終わらせてはならない。」

K子の叫びは、私の目を覚めさせる。私は、今までの経験や体験を通して部落問題を語ってはいたが、今目の前にいる生徒を真っすぐに見ていないことにK子気づかせてくれた。初めての全体学習に向けて、なんとか盛り上がるようにと、生徒のことより授業の形が先に走っていた。真実より形に心が動いていた。

形から本物へ・・・。K子は教えてくれた。

(2)隠すから名のるへ

K子のノートはさらに続く。

「・・・先生の言っていた部落民の考え方を考えた。『闘う、逃げる、死ぬ』こんなの自由じゃない。人間らしく生きたい。今の私の生き方は『隠す』だ。隠そうと思えば嘘だって言える。でも、隠してはいつまでも差別は続くだろう。正々堂々胸張って言ってみたい。けど

できない。一人では何もできない。前にも書いたけど、35人、目の前にしてはとても本当のことが言えない。弱い意気地なしの人間だなと自覚した。いつも自分がいやだなんて思うことがある。自分もきれいごと書いて、えらいって思って差別に立ち向かっているかという、立ち向かわずに逃げている。人のことなんて誰も言えやしない。みんなどっかまちがっている。もちろん私もだ。・・・」

K子と私の苦悩は続く。全体学習の前日のノートである。

「・・・本当のこと言うって、すごい勇気がある。その勇気は私にはないと思う。いつだっかってこう言って逃げてきた。でも、これから先、ずっと逃げているのはちょっと苦しい。それに、2年生全体で取り組んでいるのに、意味がなくなる。自分の心に思っているありったけの言葉を口から出すときだ。逃げていては何も始まらない。何も恥ずかしいことはない。同じ人間や。考えだっただけである。自分のどういう考えかをわかってもらいたい。そのためにはやはり自分が言うべき。自らが手を挙げて発言したい。がんばるぞ。」

全体学習の当日を迎えた。私も生徒も日頃と何か違う。がんばらなければという思いは、自然と体を緊張させる。授業は始まった。私は授業の前、K子に、「言いたくなったら発言すればいい。」と話していた。K子もにこやかに、「うん。」と答えた。しかし、私は授業中ずっとK子にがんばってほしいと願っていた。そればかりが頭を駆けめぐる。K子も今までの自分の思いをどうにかして伝えようと必死になっているのが前から見て痛いほどわかる。結局、K子は発言することができなかった。

授業を終えたその日の感想文である。

「勇気なかった。自分の言いたいことが言えなかった。とうとう私は逃げてしまった。がんばるぞって書いたのに・・・いまさら後悔しても無駄だけど、言いたかった。自分の腹の中にあるものを吐き出したかった。手も肩もどこか震えていた。心の中で、さあ手を挙げる、挙げるんだって言っているけど手が挙がらない。あまりの緊張に冷汗が出た。森口先生はその緊張に気づいていたのか、授業が終わったあと、「K子よ、言いたいことがあったら言えよ。」ってぼそっと言われました。そして、マイクで、『私はこんなに苦しんでいるのに、言えない。手がどうしても挙がらないその思い・・・』って言われたとき、涙が出るほどつらさがにじんできた。涙が出ないように上を向いたり、時計を見て紛らわせていた。泣きたかった。気が済むまで言って泣きたかった。・・・」

その後も私は、K子が胸張って言える学級づくりができなかった。しかし、K子から部落差別の現実をしっかりと学んだ1年間であった。

飛ぶように過ぎていった1年間。その後も引き続き、3年生を担任することになる。他の先生方も1名の先生を除けば、皆もち上がりであった。全体学習を共に行ってきたがゆえに、全体学習を続けていくことは、何の抵抗もなかった。

2年生のときには、「部落」という言葉が石のように重かった。

吾子よ

お前には

胸張ってふるさとを名のらせたい

“これが私のふるさとです”と名のらせたい

3年生になった1学期、丸岡さんの「ふるさと」に学ぶ。学級の中でそれぞれに置かれた自

分の立場を宣言していく生徒たちが、一人また、一人と増えていったのはこの頃からである。まだまだ「部落」という言葉は重いが、立場宣言をすることによって、自分自身を変えたい、あるいは、自分自身を解放したい、仲間とつながりたいという決意が生徒をそうさせていったのだと思う。

K子は私の学級ではなかったが、堂々と胸張って立場宣言をしていた。K子は、その後も全体学習や全国の研究会でも、何かがふっきれたように思いを語るようになっていた。

全体学習のすぐれているところは、学級の枠にとらわれないことである。学年が一つの学級になっている。そこには、教師も生徒もない。一人の人間として自分の思いを語っていく。一人の苦しみ悲しみをみんなで喜びに変えていくことができる。一人の喜びをみんなでわかちあうことができる。K子の変容したその姿は、私にも眩しいぐらい輝いて見えていた。

このように全体学習によって得たものは非常に大きい。とても一言では言い表わせないが、生徒が自分の思いを語り合って生まれた仲間との絆は、真の人間としての魂となって生き続けていくと信じる。どこに行っても、どんな状況になっても部落問題を語るができる生き方を、全体学習を通して学んできたと思う。

3. おわりに

4年が経過した全体学習。決して順風満帆ではなかった。むしろ、強い逆風に向かってへし折れそうになる櫓を一生懸命漕いできた。船内にはたくさんの人が乗っているが、最初は櫓を漕ぐ人は少なかった。やがて櫓を漕ぐ人を見ていた周りの人たちは、私も、私もと漕ぎはじめていた。舵をとるものは誰もいない。行き先も決まっていなかったが、ただきつと開けるだろう明るい憂愁に向かって、黙々と進んでいる。

ある日、誰かが「もうしんどい」と言い出すが、決して漕ぐ手を休めない。船内ではいつもけんかがおこる。泣きじゃくる。怒りに震える。すべての人間の感情が独自の色でぶつかり合ってきた。やがてその色は時と共に溶け合うが、それも束の間、また新しい独自の色が生まれてくる。けれども、今日もそして明日も船は前に進むだろう。「がんばろう」という大きな掛け声が、時には、「負けないで、逃げないで」という小さな囁きが、一人ひとりを励まし支え合っていた。

逆風に向かうとき、みんな苦しい。ある時、船の方向を変え追い風に乗れば、みんな楽になっていた。しかし、私たちの船は、追い風を選ばなかった。一生懸命櫓を漕ぐことで、人間として生きていることを感じたからだ。そのことを感じられたとき、行き先がやっと見えてきた。かすかに見えていた光が、はっきり見えだした……。

様々な峠を越えて、今年度も全体学習は終わった。今年度の全体学習のスタートは、学習会での部落問題学習に始まったと思う。そこで部落の生徒の思いが一気にあふれ出る。同時に涙が流れる。その涙は、部落差別に対する怒りと、本当に思うことが語り合えた喜びの涙であった。そして、互いに仲間のもつ意味をもう一度確認し合っていた。

第1回学年全体学習。学習会のことを中心に話し合われる。生徒は自然に立場宣言をしている。もうそこには、3年前のように涙はない。まず部落の生徒同志がつながった。そして、部落外の生徒が部落の生徒の思いに添えていった。

学習会も様々な行事が行われ充実していた。学習会場は5会場あるが、日頃5会場の生徒が

一同に会することは少ない。そこで、学習会合同学習と名を打って仲間の思いをより広め、より深く語り合った。他校との交流学習会も行った。一泊研修会など、参加者も増えてきた。学習会の充実、そのまま学級や学年での部落問題学習の充実につながっていった。学習会の充実、生徒のがんばりはもちろんであるが、生徒に寄り添う先生の姿が何人もいたことを忘れてはならない。

同和教育担当になってから2年を終えた。生徒や保護者、先生から学び続けた2年間であった。教師になったとき、学習会の存在さえも知らなかった私に、人間として生きることの意味を教えてくれた。自分の思いを語れば、何倍も思いが返ってくる。それはほとんどが差別に対する怒りである。また、今もしっかりと部落差別が生き続けていることを切々と語られる。しかし、決して卑屈になってはいない。全ての人たちが誇りをもって生きている。その生き方は、私に人間解放に向けて共に歩く喜びを教えてくれた。特に生徒が目に見えるように変わっていく姿にどれだけ勇気づけられたことであろうか。学習会で部落問題学習をする時などは本当に楽しみであった。この生徒たちとなら社会を変えることができる、そう思って学習会に行かせてもらった。

生徒が変わっていくにつれ、教師も変わっていく。いつも真剣そのものである。教師の人間解放への思いは、学習指導案にびっしりと綴られていった。何度も何度も自分の思いを確かめ指導案に綴り、それをもとに教師間で時間をかけて語り合う。ある教師は、自分の生い立ちや部落解放への思いを50ページにも著す。すべての教師が部落差別とどう出会い、どうかわって生きてきたかを書き綴っている。自分と部落問題のかかわりが明確にできれば、その思いは必ず生徒に伝わると信じているからだ。授業記録にしてもそうである。自分に何ができると考えた時、夢中で授業記録を書き下ろす。指が腫しょう炎になるぐらいワープロをひたすら打ち続ける。みんなが部落解放の熱をもち続けてきた。

生徒は見事に応えていった。教師の思いに応えて自分自身を一生懸命語り出す仲間がいた。さらに、がんばる仲間に応えて一人、また一人と語る仲間が増えていった。止めどなく意見が飛び交う。学習会場、学級、体育館がいつも熱気にあふれていた。ある日の全体学習で、この熱はどこから生まれてくるのだろうかという問いかけがあった。誰かに燃やされてはいないのだろうか。人のために燃えようとしているだけではないのだろうか。いや違う。誰もが自分自身のためだと語った。

4年前、「語ることのできなかつた自分から語っていく自分へ」から始まった部落問題学習。それはやがて「変えられていた自分、燃やされていた自分」から脱却していた。「自ら燃え続ける、自ら変わっていく自分」に変身していった生徒は、自分自身が差別から解放される喜びをつかみ、また誰かにその喜びを伝えていこう。

・・・行き先がやっと見えてきた。かすかに見えていた光が、はっきり見えだした・・・それは人間として生きるための人間解放の光だった。